双ケ丘中だより

京都市立双ケ丘中学校　6/16　第９号　文責　林

学校教育目標　「自らの未来を切り拓く，心豊かな生徒を育成する」

修学旅行を終えて（その３）

３年生は，修学旅行で５月３１日（火）から６月２日（木）まで２泊３日で沖縄を訪れました。遅くなりましたが，３年生の修学旅行を終えての感想を引き続き紹介します

修学旅行での民泊，二日目の昼前。第二次世界大戦時，全国で唯一地上戦が行われたのが，そこ，伊江島だった。小さな子どもから老人まで，動ける人間は全員何らかの役目を与えられ，日本の勝利のために働いたという。その中には私達と同じ歳の子どもがいて，自ら志願して兵隊についていったそうだ。

前述した言葉は私を含め，５人の生徒がお世話になった民泊のおばあが忘れないようにと教えてくれたものである。戦時中，アメリカ兵が島のどこからでも見えるグスク山という小さな山にアメリカ国旗を打ち立てた。それは言わば，伊江島が負けたことを指すものであった。大人たちは国旗を見ると，アメリカ兵に捕まらないようにと，爆弾を使い，多くの人々がかくれていたアハシャガマというガマで自殺をはかった。その時，小さな子ども達は何も知らされることはなかったが，少し歳を重ねた子は大人が何をしようとしていたかをうっすら感じており，生きたいと強く願う者もいたそうだ。だが，そんなことを言い出せるはずもなく，亡くなった。

今は，戦争中ではない。だとしても，生きたくても生きられない人はいる。同時に，自ら命を絶ってしまう人もいる。今の世，あまり死というものを意識する人は少ないと思う。だが，当然生きるものとしては身近にあるものではないだろうか。自分が誰かに伝えることで，誰かが自分に伝えることで死につながってしまうことはないと言えないことである。つまりは自分を肯定されることで生きようと思える人もいるということだ。私には，遠くの人を救うとか，この世界から戦争をなくすなどの大きなことは言えないが，戦争に対する反対の意識を持つことと，他人，できるなら自分をも肯定できる人間になりたいと願い，動くことはできる。この気持ちを忘れず，活かしていきたい。

修学旅行思い出写真館